



大阪の 社会福祉

The social welfare in OSAKA



過ごしたいように過ごせる、 話したいことを話せる居場所

▲大正区 泉尾東地域の宿題カフェ終了後の一枚

2・3面

大正区 活動者の広げ方のススメ8

地域活動に携わっているからこそ出会う方、できる経験がある魅力

▼人は展示に夢中だから、こちらが気を付けていないとぶつかる。「ごめんなさい」を言い続けるのは嫌だなと思って、なるべく人ごみの中に入らないようにすることが第一歩▼それでも、展示を見ながら横に移動する人たちの中で、車いすは横には動けないので、多少はぶつかる。ぶつかってくる。「ごめんなさい」より「すみません」程度の謝罪は言った方がいいなと思った▼混雑の中でもちゃんと気づいて、自分からよけてくれる人もいて、これは「ありがとう」を言った▼ほとんどの展示物ではすぐ近くに寄ることは難しかったが、「ごめんなさい」「すみません」「ありがとう」を言い続けて、それなりに楽しむことはできた。ときどき誰もいないところもあって、展示の仏様に感謝だ▼美術館側に少し配慮してほしいと思ったのは説明文。後ろからだと前にいる人の頭に隠れるし、文字が小さすぎて、車いすからはほとんど見えなかった▼車いすの人も見に来るということを知り、鑑賞する人にも美術館にもちよつと意識してほしいと思った。

(石)

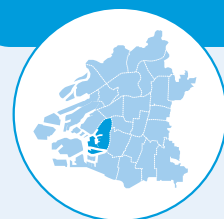


車いすの知人と、大阪市美術館で行われていた国宝展を見に行った。すごい人出で、車いすで十分展示を見ることのできるかと心配したが



社会福祉法人
大阪市社会福祉協議会





活動者の広げ方のススメ8

地域活動に携わっているからこそ出会える方、
できる経験がある魅力

新たな担い手の発掘をめざして、市内各区・地域の工夫をこらした取り組みを紹介しています。（「活動者の広げ方のススメ1〜7」は、令和6年1〜4、7、11、令和7年2月号に掲載）

今回は、大正区泉尾東地域社会福祉協議会の会長を務める山本文雄さんに地域での取り組みや思い、今後の活動の担い手づくりを広げていくための工夫点などについて、お聞きしました。

あわせて、当地域の取り組みの一つで、5月18日に開催された「宿題カフェ」に訪問し、活動者の小松真里さんと向井信子さんにも活動するうえで大切にしていることや今後の展開などについてお聞きしました。

泉尾東地域は、大正区の北東部、国道43号線の南側に位置しています。令和2年度国勢調査によると、当地域の人口は8,481人です。

相手の話は最後まで聞き、 自分の思いを伝えて 共感を得る

地域活動を始めるに至ったきっかけについて教えてください。

山本 地域活動に携わるようになったのは、父親がもともと活動しており、そのまま受け継ぐことになったのがきっかけです。現在は、地域社会福祉協議会



▲泉尾東地域社会福祉協議会会長の山本さん

（以下、地域社協）やまちづくり実行委員会、大正区民生委員児童委員協議会などの会長をはじめ、保護司や総務省行政相談委員等の活動もしています。

長年、地域で活動していることから、活動の魅力や活動を続けることができる原動力について教えてください。

山本 長年地域で活動していますが、いろいろな活動に関わっているの、書類作成もあり、忙しくて大変です。昔は夜中に電話がかかってきて暴言を吐かれたり、私の力ではどうにもならないお願いもあり、どうしてもいいものなのかと考えていたことは懐かしい思い出です（笑）

ただ、さまざまな活動に関わっていたからこそ、出会うことができた方が多くおり、このつながりは財産となっています。また、人前で話す機会やICTを学ぶ機会もあったりと、貴重な経験ができています。

活動するなかで、大切にしていることや意識していることを教えてください。

山本 活動するうえで大切にしていることは、自分の思いが伝わるように伝えることです。また、一人ではできることに限界があるので、協力していただけるよう、自分が見本となるように意識して行動しています。特に、令和2年に会館の建て替え工事をする事になり、ご

理解いただけるよう地域会議などで、自分の思いも込めて説明しました。その結果、協力者を得ることもつながりました。ほかでは、傾聴も大切にしています。できること、できないことがありますが、頭ごなしに否定するのはなく、相手が言っていることを最後まで聞くように努めています。

最後に泉尾東地域、ひいては大正区が、どのようなまちになってほしいと考えますか？

山本 やはり、ここに住んでよかったと思ってもらえるよう、ええまち大正“にしていきたいです。そのためには、地域活動を継続・推進していく必要があります。



▲建て替えた会館前のスペースでオープンテラス席をつくってのふれあい喫茶

泉尾東地域の主な活動（一部）

- ・高齢者食事サービス
- ・ふれあい喫茶
- ・百歳体操
- ・子育てサークル
- ・防災関連事業
- ・敬老お祝い会
- ・子どもフェスタ
- ・スポーツ交流会
- ・地域清掃活動
- ・年末夜警
- ・子ども見守り隊活動

が、担い手を広げていくことが課題となります。地域社協の活動に限らず、民生委員・児童委員や保護司などでも困っている現状です。任意の活動ですので、なかなか難しいですが、活動に携わることでの魅力、思いを知ってもらえるよう伝えることが重要かと思っています。小学校に行つて、大人になったら地域活動に関わりたいと感じてもらえるよう、こどもたちへ話したこともあります。

それぞれが自由に 楽しく過ごせる場

宿題カフェは、毎月第3日曜日に泉尾東福祉会館にて、小学生を対象とし、午前10時から午後2時まで開設しているこどもの居場所づくりの取り組みです。取材当日は約50人の参加がありましたが、過去一番多かった時は70人を超える参加があったとのこと。

参加したこどもたちは、学校の宿題をする子、ゲームや会館

前のスペースで鬼ごっこをして遊ぶ子、工作等のレクリエーションを楽しむ子など、それぞれが楽しいひと時を過ごしていました。お昼には、活動者の方々が手作りの食事を提供しており、取材当日のメニューは肉じゃが、小松菜とツナの炒め物、大根とポテトチップスのサラダ、シロナの味噌汁でした。

運営では、女性部などの地域活動者、ボランティア、同地域にある福祉施設の職員などが協力



▲学校の宿題を終わらせて、遊びに熱中しました

して活動しています。

この取り組みは、平成30年から活動していますが、最初はこどもたちへ情報が届いていなかったことから、活動者の方のぼりを持つて公園等を回り、こどもたちを誘って集めていたこともあり、学校でチラシの配付や町会掲示板へのポスター掲示、泉尾東e回覧での発信をおこない、保護者や地域の方々へ広く周知しています。

参加者から活動者として 帰れる居場所に

活動者の小松さんは、「この活動は、学年が違うこどもたちが交流できる機会にもなっています。また、いろいろな助成金や食料の寄附をいただけるよう、申請して活動の継続につなげています。お金や物資の確保も必要ですが、今後も活動を継続していくためには活動者を増やしていく工夫が重要です。ただ、こどもの活動であるため、誰でもいいかず、この活動に参加したこ



▲「美味しい!」「野菜苦手」と笑顔で正直に感想を伝えるこどもたち

反対にこどもたちから パワーをもらえる場

同じく活動者の向井さんは、「こどもたちはパワフルでにぎやかなので、大変で疲れますが、活動者のみなさんやこどもたちと関わって楽しいですし、こども

たちの成長を間近で見ることができると喜びがあるので、活動のモチベーションアップにつながっています。活動する際には、毎回保険をかけていますが、幸いにもまだ現在のところは、大きなケガをするこどもは出ていません」と話しました。

また、向井さんは、「個人的に泉尾東地域は、一人つ子のこどもが増えていると感じています。学年が違う年上・年下と関わることで、同い年ではない人との接し方を学ぶ機会にもなっています。今後は、そうめん流しや水遊びなど、こどもたちに何がしたいかを聞きながら、こどもたちが喜ぶことを続けていきたいです」と述べました。

活動者を広げていくためのポイント

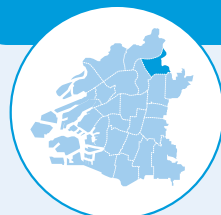
思いを伝えることで共感を得て、同志を集める

- 頭ごなしに否定するのではなく、相手の話を最後まで聞き、自分の思いが伝わるように伝える
- 協力者を得て、仲間を増やし、一緒にすすめる

活動に関わりたと思ってもらえるよう発信し、 未来の担い手づくりにもつなげる

- 活動に関わることで得る魅力を発信していく
- こどもたちが将来、活動者として関わりたいと思ってもらえるよう伝える





地域住民の声がきつかけとなり、 地域・施設・社協が協力して活動 ～あさひあったかお買い物ツアー～

旭区社協は、5月29日にベルファ都島ショッピングセンター（以下、ベルファ）を先として、一人で買い物に行くことが難しい高齢者を対象に、「あさひあったかお買い物ツアー」を実施しました。

このツアーでは、大宮連合振興町会や旭区社会福祉施設連絡会（以下、施設連）に協力いただき、大宮地域から5人の参加があり、高齢者のお買い物をサポートする「お買い物ボランティア」を設けました。当日は、いろいろな売り場を回りながら、ボランティアから「探していた商品はここにありますよ」と声をかけてもらい、会話を楽しみながら、欲しかったものを購入している様子が見られました。



▲何を買いたいか話しながらショッピング（一番右：蒲女性部長）

地域住民の声が きつかけとなり、活動開始

この取組みは、大宮5丁目に住む方から、「近くにスーパーが少なく、衣料品などを購入することができず、お店もなく、大きな幹線道路に分断されているため、どこかへ出かけるにしても不便で困っている」との声があったことがきっかけとなりました。この課題を施設連で検討したところ、施設連を代表して高殿苑（高齢者福祉施設）が送迎の協力をしていただけることとなり、令和元年度からこの地域を対象として活動が始まりました。

初回の実施以降は、コロナ禍の影響もあり中断していましたが、令和4年12月には新たに、大宮連合振興町会や女性部の協力を得て、区内の商店街でおこ

ない、再開へとつながることができました。

しかし、商店街で実施したところ、自由に使用できるトイレや休憩スペースがなく、また、行きたいお店まで距離があったりなど、いくつかの課題がありました。

これらの課題を受け、大宮地域の活動（ふれあい喫茶や百歳体操等）に参加している方、町会に加入している方へ、買い物に対して不便を感じているかどうかのアンケート調査をおこないました。アンケートでは、お買い物ツアーの紹介もおこない、参加を希望するか、実施してほしい時期や場所なども聞き取りました。

地域の課題を解決する 手立てをともに考える

アンケートの結果では、参加を希望される声や将来的に一人で買い物をすることを不安に思われている方が多く、実施場所も食品から衣料品まで購入できるベルファを希望する声が多く寄せられました。

アンケートの結果を受けて、運営メンバー（地域役員や区社協職員、高殿苑の職員など）で話し合うなかで、高殿苑の職員から「地域の会館を集合場所にするのではなく、会館が遠い方もあると思うからご自宅付近



▲施設職員のサポートにより車に乗り込む参加者

一人では大変なお買い物 もみんなとなら楽しめる

「一人で迎えるのはどうか」と提案がありました。また、より多くの方に参加してもらえようという対象者を拡大したりなど、みんなで協力し、令和6年11月に再スタートしました。

お買い物ツアーをサポートしていただくボランティアは、主に「お買い物付き添いボランティア講座」を受講した方で、開催前には事前に集まり、活動趣旨や活動上の留意点、お買い物ボランティアの基本なども説明し、ボランティアのみなさんと区社協近隣のスーパーへ実際に研修もおこなうなど、入念に準備しました。

今回参加していたボランティアの方からは、「参加者自身がほしいものはリストアップしてい

ましたが、どの商品にするか悩まれていることもあったので、そこをサポートできてよかったです」「参加者に喜んでいただけたので、よかったです。参加者の方とお話もできて、自分自身も楽しかったです」と話していました。

参加者からは、「昔はよくここにも買い物に来ていたけど、最近では来れてなかったの、久しぶりに来るのができてよかったです」「みんなと話しながら買い物していると、あつという間に2時間が経過しました」「なかなか一人では来れないところなので、買いたいものをすべて買うことができて満足しました。み

なさんと買い物できて幸せでした」などの感想がありました。

施設・地域団体とともに 地域の輪を広げる

この取組みは、区社協と地域団体、施設連に加盟する社会福祉施設の協力をもとに成り立っている活動でもあります。実施する区社協だけで構想し企画するのではなく、実施前には打合せをおこない、活動後の反省会を経て、毎回ブラッシュアップしています。

施設連を代表して協力している高殿苑の職員からは、「施設職員として、何か地域のみな

まのお役に立ちたい」との思いはあるものの、なかなか関わる機会が少ないなか、このお買い物ツアー活動は地域の方々と直接ふれ合うことができる機会であり、非常に素敵で有意義な取組みだと思っています」と意見がありました。

続けて、「この活動をより多くの地域のみなさまに知っていただき、この活動を必要としている方が一人でも多く参加でき、お買い物を通じてハッピーになってほしいです。普段は施設の利用者との関わりが中心なので、このように地域の方と関わる機会があることで、地域のなかでど

のような困りごとがあるのかを知る機会にもなり、我々も勉強になっています」とも高殿苑の職員の方は話しました。協力している地域団体のなかで中心となって活動している大宮連合蒲眞佐子女性部長は、「参加者からの感謝の言葉がすごい励みになっています。高殿苑には当初から協力いただいています。高殿苑からの提案で参加者の自宅付近まで迎えに行っていたので、とてもありがたいと感じています。このお買い物ツアーを継続しつつ、現在は大宮町会内の方を対象とした取組みではありますが、まだまだ地域には困っている方がいると思いますので、他の地域にも取組みの輪が広がり、旭区全体に広がってほしいと考えています」と話しました。

地域のなかで定着した 活動をめざして

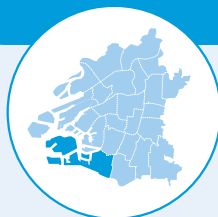
取組み終了後、区社協の森山彩夏第1層生活支援コーディネーターは、「この取組みは現在施設連を代表して、高殿苑や地域団体に協力いただきながら、区社協が主となり実施をしています。今後は、地域のなかで定着した活動となり、開催回数の増加、定期的な活動へとつな

課題

- 大きな道路があり、横断するのが大変なため、買い物に行きづらい
- 食料品は何かと購入できても、衣料品などを購入することができるお店が近くにはなく、買いに行くことができない
- 将来的に一人で買い物することを不安に思っている

地域でできること

- 地域ができること、区社協ができること、施設ができることをあわせ、連携して取り組む
- 区社協や施設と協力して、打合せやふりかえりをおこない、ブラッシュアップする



認知症になっても自分らしく活躍できる場

～みんなが主役「K.Y.食堂」～

住之江区にある西尾レントオール咲洲R&D国際交流センターでは、地域に根付いた施設として、地域住民や支援者など誰でも活用できるシェアカフェスペース「N・L・O・U・N・G・E」を設置しており、ここでは「産官学民交流」を一つの軸として、カフェなど開業へのトライアル出店に向けた場を提供し、スタートアップの支援がおこなわれ、複数の店舗が毎日日替わりで出店しています。

今回、毎週月曜日を担当している「K.Y.食堂」の店長を務めているユミちゃん、認知症の当事者であり、一緒に働いているクミちゃんに活動の経緯や魅力などをインタビューしました。



▲クミちゃんと認知症地域支援コーディネーターの杉井由美子さん

気軽に立ち寄り、安心できるみんなの居場所

K.Y.食堂は、午前11時30分～午後3時30分まで営業しています。店名の「K.Y」の由来は、店長のユミ(Yumi)ちゃんと、認知症の当事者であり、一緒に働いているクミ(Kumi)ちゃんの名前の頭文字をとって名付けられています。

また、「(K)こだわらない・(Y)ゆつくり」をコンセプトに、来てくれた人やその場にいるみなさんがゆつくり、心地よく、話したいことを話せる場になることをめざしています。店長のユミちゃんがお店を切り盛りし、クミちゃんは来店した方々と会話を楽しみながら、料理の盛り付けや配膳、お皿洗いなどを担当しています。そして、認知症サポーター養成講座のステップ



▲役割分担して、全員で協力して活動

アップ研修を受講したオレンジサポーターの方々がクミちゃんをサポートしています。店長のユミちゃんは、「クミちゃんが楽しく、無理なく続けられるようにというのを第一に、誰もが作業できるような方法を考えています。クミちゃんやオレンジサポーターのみなさんの協力があつて続けることができます。このような活動や取り組みがあることで、認知症になっても地域で暮らすことの選択肢が増えてほしいです」と語りました。

クミちゃんは、「少しずつ慣れ、たくさん仲間ができて楽しいです。もともと食べるのが大好きなので、毎週月曜日が楽しみです。最近は親子連れが来てくれることも増えて、うれしいです」と話しました。

顔の見える関係から生まれる多様なつながりの輪

店舗開業は、咲洲地域で働く人や団体、企業が気軽に情報発

信や共有、交流できる場として開催されている「サキシマ meets」において、クミちゃんのご家族と、普段は障がい者の支援団体職員であるユミちゃん、同団体で広報を担当している菊池仁さんが出会い、クミちゃんを食べることで料理が好きということを知って、「じゃあ一緒にやってみる？ おもしろいことをやろう！」と声をかけたことがきっかけでした。

オープンに向けて具体的に形にしていくなあたり、菊池さんから、認知症地域支援コーディネーター兼認知症地域支援推進員(住之江区認知症強化型地域包括支援センター)の杉井由美子さん、住之江区社協の楊裕成第2層生活支援コーディネーターに声をかけ、活動内容について話し合う機会をつくりました。

菊池さんは、「サキシマ meets」での杉井さんとの出会いを機に、認知症地域支援コーディネーターやオレンジサポーターを知りました。また、K.Y.食堂をより多くの地域の人に知ってもらうためには、地域のことをよく知っている区社協の楊さんに相談しようと思いました。いろいろな人を巻き込みながら、つながりの輪が広がっていきました」と話しました。

また、続けて菊池さんは、「K.Y.食堂の特徴は雑談が多いことです。誰しも初めから困りごとを話すことは躊躇うけど、何かやらないといけない、話さないといけない、と気負わずに雑談でもいいので話しに来てほしいです。雑談から困りごとを聞ける場になればと思っています」と活動に対する思いを語りました。

認知症を気軽に学べる場所

K.Y.食堂では、認知症について学べる場にもなるよう、毎月認知症サポーター養成講座が開催されており、この日は、オレンジサポーターとしてクミちゃんをサポートしている竹内周次さんがキャラバン・メイトとして講師を担当し、16人の地域住民の参加がありました。そして、講座

終了後の座談会には、クミちゃんが認知症の当事者として参加し、交流しました。

杉井さんは、「K.Y.食堂に来られた方と雑談をしていると、認知症について困っているものなかなか相談機関に相談できず、専門的なサポートにつながっていない人が多いことを知りました。それならば、K.Y.食堂を認知症の正しい知識を学べる場にしようと考えたことがきっかけで、現在では毎月講座を開催しています」と話しました。

続けて、杉井さんは、「住之江区にオレンジサポーターの活動場所が少ないことを課題に感じていました。しかし、認知症があるかどうかは関係なく、誰もが活躍できる場ややりたいことができる場が増えれば、自然とオレンジサポーターの活動の機会も増えるのではないかと考えています」と語りました。

クミちゃんが楽しそうに活動する姿が雰囲気を作る

キャラバン・メイトを担当した竹内さんは、「母を介護した経験を活かし、地域をよくしたい、みんなが暮らしやすい地域にしたいという思いで活動しています。認知症サポーター養成講座後の

座談会ではクミちゃんにも参加してもらっていますが、クミちゃんが楽しそうに活動している様子は、受講者のみなさんの表情を明るくしてくれます」とメッセージを送りました。

受講者からは、「気軽に学ぶことができました。こういう場所をこれからも続けてほしいです」「クミちゃんに会うことを楽しみに、K.Y.食堂にも来ています」などの感想がありました。

雑談からヒントを得て活動につながる

K.Y.食堂の活動を一緒に考えている区社協の楊第2層生活支援コーディネーターは、「日常の困りごとや助けてほしいことも雑談だからこそ人に話せることがあります。距離があると感じる異業種でも、互いについて知り、理解することでつながることができま



▲認知症サポーター養成講座後の座談会の様子



社会福祉施設の地域における公益的な取組みをご紹介⑤

社会福祉法人大阪婦人ホーム

社会福祉法人大阪婦人ホームでは、令和5年11月から毎週火曜日午前7時30分〜8時15分頃まで、同施設内の地域交流センターにて、近隣の小学生を対象に朝食を提供する「はやねはやおきクラブ」を実施しています。活動を始めた当初は10人ほどの参加者でしたが、現在では35人を超える参加があります。スタッフは、同法人の救護部門の職員、保育部門の職員、地域の保護者の方などでローテーションを組んで活動しています。準備する朝食では、基本的なおにぎりや汁物で、時にはカレーなども提供しています。今回は、6月10日に実施され、スタッフや参加している小学生へインタビューした内容等を紹介します。

自分たちで考えて活動をつくる

当日は、あいにくの雨でしたが、35人もの参加がありました。参加した子どもたちは、ご飯を



▲スタッフのみなさん(石田易司さん：一番左、目さん：左から二番目、中さん：前列右から3番目、藤田さん：前列右から2番目、福越さん：後列)

食べ終わると、「行ってきます！」と元気に職員へ伝え、職員も「行ってらっしゃい！」と見送りしました。

この取組みは、年に1度、平野区社協や区役所、学校の校長先生や地域の施設などが集まる会議で小学校の先生と知り合ったことがきっかけで始まりました。

施設長の福越さんは、「学校の先生から、『早朝に校門前で学校が開くのを待っている子どもたちがたくさんいます。おそろしく朝ご飯を食べていない子どももいるかと思うので、

朝に集まることのできる居場所をつくることはできないでしょうか」と相談がありました。トラック等の車の交通量が多く、通学路から外れていることもあり、安全が確保された道ではないため、交通事故に遭わないか心配がありました。また、スタッフでやってくれる方がいるのか、業務が増えたと感じて負担を感じないかなど、情報共有していいものなのかなども悩みました」と話しました。

続けて福越さんは、「悩んでいましたが、理事長に相談して職員会議であげると、『地域のためにやりましょう！』と言ってくれて、活動開始につながりました。やらされ感なく、自分たちのできる範囲で実施できるよう、私以外のスタッフが学校まで行き、先生と話し合いました。

行きたいと思う居場所をめざして



▲「今日もたくさん食べてくれたよかった」と喜びながら片付ける終了後の一枚

私が決めてしまうと、押し付けの「やらされ感」が芽生えてしまうと思ひ、自分たちで活動をつくりあげる「やりがい」へとつながることを大切にしました。学校と話し合いをした結果、学校からの協力も得られて、安全な道の導線を誘導していただいたり、チラシも配布していただけた。心配していましたが、活動できて、うれしく思っています」と語りました。

れる時はうれしいです。また、提供しているご飯の食材は、パルコプや保護者等から寄附をいただき、運営しています。今後も継続して開催できるように、寄附を集めたり、食事メニューの工夫などを頑張っていきたいと思っています」と話しました。

同じく、職員の中さんは、「髪型や身長、雰囲気などで少しの変化に気づいた時は、声をかけるように意識しています。気付いてあげると、子どもたちも自分のことを気にしてくれていると感じるのか、喜んでくれます。『はやねはおきクラブ』が、子どもたちにとって行きたいと思える居場所へとつながるよう、愛情込めて子どもたちと関わっていききたいと思っています」と述べました。

参加している子どもたちからは、「毎回参加して、楽しい」「みんなでご飯食べて、美味しい」「放課後も開けてほしい」などの感想がありました。

それぞれの役割を果たして、機能を補い合う

同法人理事長の石田易司さんは、「きっかけは学校の先生からの声かけではありますが、できることをできるタイミングで活動することが大切だと思っています。この活動があること

で、地域の子どもたちと関わることでできる機会になっています。従事している職員は、いろいろな視点で子どもたちの変化を見ているので、子どもたちに関する情報を共有し合い、職員同士が、交流する機会にもつながっています。今後も学校ではなく、施設がおこなう居場所所だからこその機能を活かし、学校や地域と協力して役割を果たしていきたいと思います」と語

りました。

活動開始当初から関わっている職員の目さんは、「活動開始当初は、人見知りからなかなか話してくれない子どももいました。今では慣れてきたのか、打ち解けてこどもから話してくれます。活動に参加しているこどもで、宿題を持ってきているこどももいることから、今後は学習できる機会もあるといいのかなと思っ

います」と話しました。

今後の展望として、福越さんは、「職員が主体的に取り組んでいるので、この活動を始めてよかったと思います。活動では、朝に実施するメリット、夕方・夜に実施するメリットがあるかと感じています。学校へ登校するまでの短い時間で現在は実施していますが、参加している小学生からも出ている放課後にも何かできることはあるか、職員と検討していきたいと思っています。職員やこどもたちから『こんなことをしてみたい』という声を把握し、施設としてできることを今後もおこなっていききたいです」とメッセージを述べました。



▲子どもたちはみんなで楽しく朝食を食べました

取組みのポイント

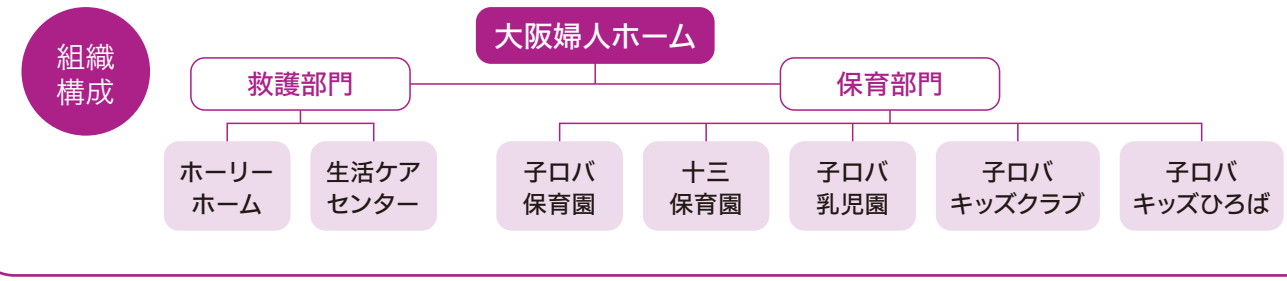
- それぞれの団体ができることをおこなって、協力して補い合う
- スタッフが自分たちで考えて活動することで、“やらされ感”ではなく“やりがい”に
- 少しの変化に気付き、取組みに活かす
- 活動者や寄附などを含め、活動に協力してもらえ方を増やす

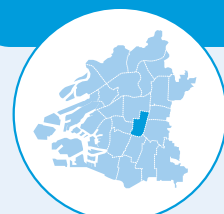
社会福祉法人 大阪婦人ホーム

明治40年(1907年)に、女性のための職業紹介と、保護、自立支援の施設として、林歌子を代表者とする、キリスト教婦人矯風会の女性たちによって創設されました。

法人の100年を超える福祉の実践のなかで、先人たちが大切にしてきた、法人理念の「隣人愛の精神」を、現代の生きる私たちは「すべての人が大切にされ、いのちを輝かせることができる社会をつくる」という言葉に集約し現在も継承しています。

事業としては、女性のための救護施設「ホーリーホーム」「生活ケアセンター」で権利擁護、生活支援、就労支援、自立支援をおこなっています。保育事業部門もあり、幼保連携型認定こども園「子ロバ保育園」、保育所型認定こども園「十三保育園」、乳児園「子ロバ乳児園」、放課後児童クラブ「子ロバキッズクラブ」、障がい児通所支援事業「子ロバキッズひろば」も運営しています。





孤独・孤立の課題を踏まえ、 笑いあって、元気になる場 「勝三第1住宅での取り組み」

天王寺区聖和地域の大阪市営勝三第1住宅では、ボランティアグループの「勝三第1住宅ふれあい活動」が居住者を対象として、毎週金曜日（第3週のみ土曜日）に百歳体操、第2土曜日に「にこにこ食堂」、毎月第4火曜日にふれあい喫茶、毎週月曜日～土曜日にラジオ体操、毎月第3土曜日に娯楽の日などのさまざまな活動を実施しています。

そのなかでも今回は、6月14日に実施された「にこにこ食堂」での活動者や参加者のみなさんへインタビューした内容等を紹介いたします。



▲左から代表の植村さん、自治会長の前川さん

住宅での課題を感じ、 何かできないか

「にこにこ食堂」は、午前11時30分から午後2時まで活動しており、取材当日は20人近くの方が参加していました。提供されている食事は、活動者の方々の手作りであり、当日は、代表の植村妙子さんのおふくろの味である信田煮をメインとしたお弁当でした。また、食後にはコーヒーやお菓子の提供もあり、参加した方々で交流できる機会となりました。

この取り組みのきっかけは、代表の植村さんや自治会長の前川文和さんによると、勝三第1住宅において、住民同士が交流する機会が少なく、孤独・孤立している高齢者が多いと感じており、交流を通してつながりをつくる機会が必要ではないかと思ったことでした。孤独・孤立の予防や住宅内で住民同士が見守り合える



▲ちょっと見かけたことがある関係から冗談を言い合える間柄へ発展



▲誕生月の方へお花をプレゼントし、みなさんで祝いしました

関係をつくることのできる活動を立ちあげるにあたって、天王寺区社協の職員へ相談し、活動内容や必要物品、スケジュールなどを何度も話し合い、令和6年9月から活動がスタートしています。

参加された方々は、予約なしで300円を払って、隣同士などで和気あいあいと会話し、ゆっくりと過ごしていました。

参加者からは、「家にいると一人やけど、ここに参加すると元気をもらえます」「にこにこ食堂以外でも何かしら参加できる仕組みがあつて、楽しみです」「はじめは知らない人同士でしたが、今では冗談を言い合える関係になりました」などの感想がありました。

“笑い”を大切に

代表の植村さんは、「活動で大切にしていることは笑いです。気軽に参加できて、住宅内での孤



▲6月14日は、信田煮をメインとしたメニュー

住民同士で 見守り合える関係に

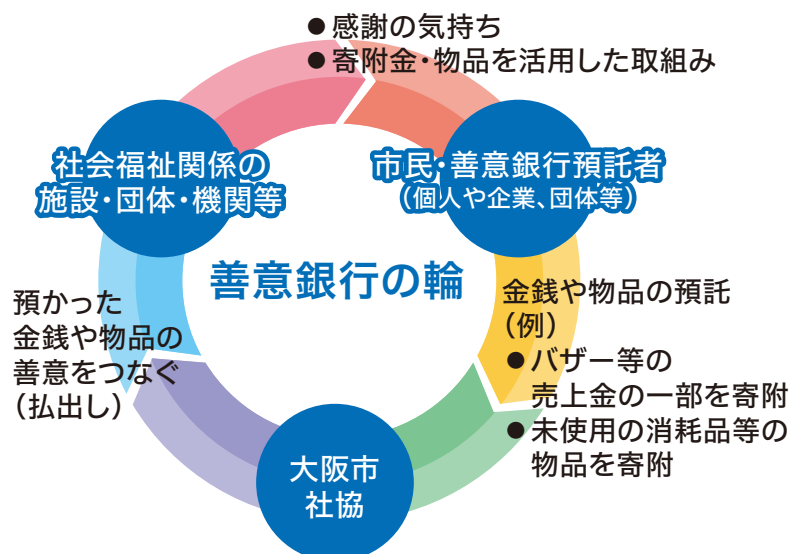
自治会長の前川さんは、「この住宅は5年前の建替えで、さまざまな方が引っ越して来られ、元々のつながりがなかったなかで、まずは声かけ、あいさつをすることから始めました。過去に孤独死もあり、孤独・孤立を予防する活動が必要だと感じていました。住民同士が顔の見える関係をつくることであればいい、活動しています。特に男性への声かけを意識し、参加してもらえようように促しています。今後はこの住宅の方だけではなく、多くの人が集い、住宅以外の方とも交流できる場をめざしていきたいと思っています」と話しました。



みなさまの善意を 社会福祉の発展に ―善意銀行―

市社協では、本会の事業運営に協力いただける市民のみなさまや法人団体からの善意の預託（金品・物品）を活用し、地域コミュニティづくりや地域福祉活動の推進を図るため、社会福祉関係の施設・団体・機関等に助成しています。

寄附された物品は、区社協を通じて、有効に活用させていただきます。



孤立死の実態から 地縁の意義を再考する

大阪公立大学大学院生活科学研究科 講師 山東 愛美

NHKの番組で用いられた「無縁社会」という言葉が大きな反響を呼んでから15年が経過した。この間、新型コロナウイルスの流行によって孤独・孤立の問題への関心が高まり、孤独・孤立対策推進法の施行など、取り組みが進められている。その一環として「孤独死・孤立死」の実態把握に関するワーキンググループが2023年に設置され、2年間の議論を経て今年4月に取りまとめを出した。

取りまとめでは、「孤独死」と「孤立死」という用語の使われ方は様々であることに触れつつ、客観的な概念である孤立を用いることが適当とした。そして孤立死とは「誰にも看取られることなく死亡し、かつ、その遺体が一定期間の経過後に発見されるような死亡の態様」とあるという概念的定義（仮置き）を示した。また、その実態を把握するための操作的定義を「警察取扱死

体のうち、自宅において死亡（自殺も含む）した一人暮らしの者で、その遺体が生前に社会的に孤立していたことが推認される死後経過時間（日数）の経過後に発見された者の数」とし、具体的には死後8日以上経過していることをその目安とした。これに基づく、2024年に孤立死であったと推定されるのは21,856件だった。

日本の現状をみると、少子高齢化、単身世帯の増加、未婚率の上昇など、様々なデータから今後も一人で生活する人が増えることが推測される。すなわち、「一人で亡くなることも増えていくであろう。こうした社会において「近所の〇〇さん、ここ数日見かけていないな」といち早く気づくことができるのは近隣住民ではないだろうか。孤立死の実態を踏まえ、改めて各地域でつながりや見守りのあり方を考えることが求められている。

※内閣府「孤立死者数の推計方法等について～「警察取扱死体のうち、自宅において死亡した一人暮らしの者」をもとに～（「孤独死・孤立死」WG取りまとめ）」
https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/wg/pdf/houkokusyo.pdf



大阪市在住の65歳以上の方対象！

令和7年4月から活動場所が拡充となり 障がい児者施設や幼稚園でも活動可能

大阪市介護予防ポイント事業は、高齢者の外出の機会の増加や生きがいづくり、介護予防を目的に、研修を受けて登録した65歳以上の方が、受登録施設で活動しています。

令和7年4月から受入施設が拡充され、障がい児者施設、幼稚園でも活動ができるようになりました。自分らしさを活かした活動で、「元気」と一緒にポイントを貯めてみませんか？

活動を始めたい！

大阪市内在住の65歳以上の方へ

ちょっとしたお手伝いや趣味・特技を活かした活動で活躍しませんか？

まずは、登録時研修をご受講ください。

ポイントについて	2時間未満の活動	1ポイント	換金は1ポイント 100円 ※6ポイントから換金可能
	2時間以上の活動	2ポイント	

登録時研修日程

日 時	場 所
7/17(木) 午後2時～3時30分	東淀川区社会福祉協議会 (東淀川区菅原4-4-37)
7/24(木) 午後2時～3時30分	西成区社会福祉協議会 (西成区岸里1-5-20 西成区合同庁舎8階)
7/30(水) 午後2時～3時30分	東住吉区社会福祉協議会 (東住吉区田辺2-10-18)
9/5(金) 午後2時～4時	生野区社会福祉協議会 (生野区勝山北3-13-20)
9/9(火) 午後2時～3時30分	旭区社会福祉協議会 (旭区高殿6-16-1)
9/11(木) 午後2時～3時30分	都島区社会福祉協議会 (都島区都島本通3-12-31)

※以降の日程でも開催を予定しています。詳しくはお問合せください。

活動者を受入りたい！

まだ登録されていない施設の方へ

本来のサービスを手厚く提供できたり、活動者が架け橋となって地域とのつながりができたり、施設側のメリットも数多くあります。

ぜひ、受入施設としてご登録ください。

<介護保険施設、事業所、障がい者施設での活動>

お話相手、配膳の手伝い、食器洗い、楽器の演奏、レクリエーションのお手伝い、お掃除、洗濯物たたみ など

<保育所・幼稚園・認定こども園・障がい児施設での活動>

行事・遊びのお手伝い、配膳の準備、食器洗い、園庭の手入れ、送迎の際の見守り など

問合せ・申込み

大阪市社会福祉協議会 福祉部
介護予防ポイント事業担当

☎ 06-6765-5610

✉ kypoint@osaka-sishakyo.jp

🌐 <https://www.osaka-sishakyo.jp/kaigoyobou/>



令和7年度

赤い羽根共同募金記念バッジデザインは

応募作品444点の中から 大阪府内の高校生の作品に決定

10月1日から全国で実施する第79回赤い羽根共同募金運動で使用される記念バッジのデザインが決定しました。近畿6府県（滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県）共同募金会が合同で募集。444点の応募作品の中から、選考委員会の審査の結果、赤い羽根賞（最優秀賞：採用作品）1点、愛ちゃん賞（優秀賞）5点、希望くん賞（奨励賞）20点を決定いたしました。

採用されたデザインによって製作した記念バッジは、今年度の共同募金運動期間中に、共同募金に協力いただいた方へのお礼や、共同募金をPRするためなどに、近畿6府県を中心に広く活用されます。

赤い羽根賞（最優秀賞：採用作品）



に い あかり
仁井紅里さん（大阪府・高校生）

制作
意図

誰かの優しさが風と共に幸せを運びますように

愛ちゃん賞（優秀賞）・希望くん賞（奨励賞）

受賞者・受賞作品については、大阪府共同募金会のホームページに掲載いたします。

ホームページ【赤い羽根おおさか】

🌐 <https://akaihane-osaka.or.jp>